

研究発表： **愛 わが地域 自慢のサービス**
地域交流で守り育てられる子どもの安全と優しさ

大阪府 大阪市立淡路小学校 三 軒 久 枝

趣 旨

国際化、情報化、少子高齢化など、社会の急激な変化により、地域社会や家庭が大きく変化をしている。また、子どもの社会性や創造性を育ててきた遊び場が減少し、地域社会の人と人とのつながりも希薄になってきた。そのような変化の中で、子どもたちは、生活体験・自然体験・社会体験などを通して豊かな感性をはぐくみ、生きる力をはぐくんでいく機会が少なくなっているといえる。

このような状況の中で、あらためて家庭の役割を見直し、地域の力を生かし、子どもを地域の宝として、地域全体で温かく守り・育てていくことが求められている。

「学校週五日制」のもと、一人一人の子どもに、生きる力を育成することを基本として新しい教育課程が実施され、今まさに教育改革が進められている。

学校は、家庭や地域の信頼に応え、連携・協力しながら、子どもや地域の実情に応じた、特色ある学校づくりを進めなければならない。同時に、保護者や地域に積極的に情報発信するとともに、その意向を把握し、学校教育に反映するなど「開かれた学校づくり」を進めることが必要とされている。

それには、学校・家庭・地域の三者が一体となった、総合的な教育力によって子どもたちの健全な成長・発達をはぐくんでいくことが必要であり、地域社会の中で子どもを育てるコミュニティの再生を図ることが重要である。

研究の概要

1. 研究のねらい

大阪市では、学校・家庭・地域がそれぞれの教育力を発揮するだけでなく、三者が一体となった総合的な教育力によって、子どもたちの健全な成長発達をはぐくみ、地域におけるコミュニティの再生を図る目的で「小学校区教育協議会 - はぐくみネット - 」を編成することになった。

そこで、本校においても、現在の取り組みを整理し、地域の特性を生かしながら「小学校区教育協議会 - はぐくみ

ネット - 」の編成にむけて、そのあり方と、校長の指導性の発揮の仕方について、探してみたい。

2. 研究の方法と目的

「小学校区教育協議会 - はぐくみネット - 」の編成にむけて

- (1) 内に開くためのアプローチ
< つなぐ・まとめる・位置づける >
指導者間
保護者と学校
地域と学校
- (2) 外に開くためのアプローチ
< 学ぶ・つながる・守る >
- 子どもも大人もつながる地域へ -
中学校区地域教育協議会
学校評議委員会
- (3) 情報発信と学校評価
< 広げる・生かす >
校長室だより
児童アンケート

3. 大阪市の「小学校区教育協議会 - はぐくみネット - 」事業

(1) 「はぐくみネット」事業の概略

大阪市は、平成14年度、学校・地域・家庭が連携し、開かれた学校づくりや、地域のコミュニティの再生を目指す仕組みとして、「小学校区教育協議会 - はぐくみネット - 」事業を立ち上げた。

まず10校区でモデル的に調査研究をはじめ、年度末には、その成果について、研究発表やパネル形式で報告会がもたれた。

いずれの実施校・地域からも、学校・地域の双方に成果があったことが報告された。

その結果をもって、平成15年度には実施校を60校区に広げ、さらに、平成16年度からの4年間で、大阪市298全小学校区にはぐくみネットを構築する考えである。

(2) 「はぐくみネット」事業の役割

学校と地域をつなぐ観点で学校教育を支援

- ・ 地域の教育資源を学校教育に導入・活用
- ・ 学校の説明責任を果たし、学校運営に保護者や地域住民の意向を反映

地域における教育コミュニティづくり

- ・ 情報提供
- ・ 地域の諸団体とのネットワーク形成
- ・ 協同事業の実施
- ・ 子育てに関する講座やイベントなどの開催促進

(3) 構成

協議会メンバ-	1校あたり4~27名
校長、連合町会長、社会福祉協議会、PTA役員 主任児童委員、民生委員 など	
事務局会議メンバ-	1校あたり3~10名
校長・教頭・教務主任、PTA役員、生涯学習 推進員、学校体育施設開放事業運営委員、児童 いきいき放課後事業実行委員 など	
コーディネイター	1校あたり2~5名
PTA役員経験者、生涯学習推進委員、民生委員 ・児童委員、主任児童委員、青少年指導員 など	

(4) 運営

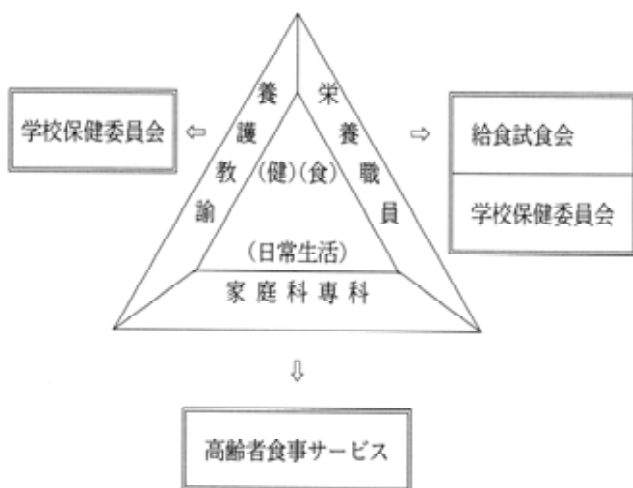
協議会 ... 年3回程度開催
事務局会議 ... 月1回程度開催
情報誌 ... 月1回程度発行

4. 内外につながる特色ある学校の取り組み

< つなぐ・まとめる・位置づける >

(1) 教職員をつなぎ、まとめる

「家庭科・栄養職員・養護教諭によるチーム指導」



登校をしがる子、しんどいと訴える子、特にどこが悪いというわけでもないのだろうが、保健室に行かないと落ち着かない子。保健室は、朝から子どもたちの居場所となっている。

体のみならず、心の傷にも絆創膏が必要な時代。基本的な生活習慣が身につかず、夜更かしして朝が起き

られずに遅刻してくる子どもたち、朝食もとらずに登校してくる子どもたち、そのような子どもたちと家庭の実態をふまえ、学校教育目標の一つ「元気ですか？心と体」の実現は急務であり、継続的でなければならない。そこで、健康教育に関わる分野で、チーム指導に取り組むことにした。児童の健康状況を最も把握している養護教諭、「食」に関わる専門的指導者として栄養職員、自分の生活の振り返りをさせるための家庭科専科、この3者の関係をうまくつなぎ・まとめて、それぞれのもつ力量を遺憾なく発揮させるとともに、校内の指導体制への刺激を試みた。

ねらいは3点である。

- ・ 指導者をつなぐことによって、自ずと指導内容・指導方法が開かれる。
- ・ 共同で研究しまとめることの楽しさを知り、指導者の意欲を喚起する。
- ・ 「総合的な学習の時間」のひとつの典型をつくり、カリキュラム化する。

どちらかという、指導に遠慮がちであった専門的な分野で指導が積極的になり、シリーズとして指導開発が行われた。

(2) 保護者と学校をつなぎ、守る

学習支援サポ-タ-

ア 「あわじ・まち探検隊」

グループで町を探検するにあたって、保護者に「学習支援サポ-タ-」を募った。

「学習支援サポ-タ-」を募る理由は2点ある。

- ・ 学習活動への安全支援
- ・ 保護者の関心を学校につなぐ

思ったより多くの保護者の参加があり、安全確保はもちろんのこと、学習活動への理解の深まりがあった。

イ 「調理実習お手のもの」

以前、家庭科実習の授業参観を行ったとき、保護者から「子どもたちを手伝いたい」という声が上がった。調理実習は、保護者の方がお手のものである。「我が家の味噌汁自慢」「簡単おやつづくり」「子どももできる弁当づくり」など、計画的に保護者参加の活動を考え、保護者への啓発も意図して学習を仕組み、「食」への関心を親子ともども高めていく。

ウ 「人形劇団」

保護者で構成している人形劇団がある。自分たちの公演練習もかね、学校でも公演の場を設けた。低学年を主とした、楽しい道徳教育にもなり得る。継続的に公演が可能ならば、学校行事に位置づけたいと考えている。

安全支援サポ-タ-

「安全パトロール・交通安全誘導」

学校周辺は、車の通日も多く、交通事故も何件か

起こっている。2年前、特に車の通りの多い危険な箇所を重点的に、PTA役員が、毎朝、交通安全誘導のボランティアを始めた。

昨年、この交通安全誘導を全保護者でという提案がPTA実行委員会でされた。手順をアドバイスし、保護者の意向をアンケート調査で確認した結果、高率の賛成を得て、PTA総会において承認された。

現在、全保護者による交通安全誘導が実施されている。また、役員は、PTA作成の安全ステッカーを自転車の前かごにつけ、校区の安全パトロールを実施している。地域ボランティアの協力もある。

まさに、「地域の子どもは、地域で守る」ということを、PTA自らが、日常的かつ継続的に取り組み続けているといえる。

(3) 地域と学校をつなぎ、位置づける

生涯学習ルーム事業と学校

ア 「いもほり・おいもパーティー」

学校の外側に、栽培活動を通して学校と地域をつなぐために設けられた「ふれあい農園」がある。昨年度から「生涯学習ルーム」が栽培活動を始めた。

せっかく設けられている、この農園の名前の通り、子どもたちとふれあうことを意図して「さつまいもの栽培」を活動に組み入れることになった。

昨年度は、収穫の際に2年生の子どもたちがいもほりを体験し、本年度は、苗植えから共にふれあうことにした。

教育課程に位置づけ、ひとつひとつふれあいの内容を確認なものにしていきたいと考えている。

さらに、これは、2年生の生活科「おいもパーティーにご招待」に発展した。「学習支援サポーター」のサポートでスイートポテトづくりに挑戦し、地域の方に招待状を出し、収穫の喜びを分かち合った。

イ 読み聞かせ隊

今年度の生涯学習ルーム事業の活動に、子どもたちとふれあうことを目的とした「本の読み聞かせ」活動を取り入れることにした。

本校では、朝読書を試みているが、その時間に、教室で読み聞かせをするための開講である。区の図書館から講師を招いて、講習をうける予定をしている。

「生涯学習ルーム」と子どもたちとの距離がまたひとつ縮まった。

地域と学校「高齢者食事サービス」

ア 経緯

本校は、平成7年以来、家庭科室を開放して地域の「高齢者食事サービス」を行っている。これは、高齢者の食事サービスにふさわしい場所がないので、学校の家庭科室を貸してほしいという地域の要望に応じて始まったものである。毎月第1火曜日に、社会福祉協

議会・女性部が中心となって行われている。

イ 児童の発表

平成12年から、学習していることを披露するという関わりをもつようになり、食後のひと時、子どもたちの発表で心ませる時間ももつようになり、参加者は、食事だけでなく、子どもたちの発表という楽しみも味わえるようになった。

ウ 「発表」から「交流」へ

地域に開かれた学校づくりをするにあたって、この取り組みは、現代的な要求に即した大変貴重なものであると考える。そこで、学校の特色として充実させるため、「発表」から「交流」へと発展させ、教育課程に位置づけることにした。平成15年度の学校教育目標の具体化の中で、この「高齢者食事サービス」を「総合的な学習の時間」の地域交流に位置づけ、内容の充実を図ることにした。これまでの取り組みを充実させる意味で、以下のことを提示した。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 低・中・高学年で内容を考え、年間を通して計画的に実施する。・ 「生活科・総合的な学習の時間」に位置づけ交流活動に発展させる。 <p>《交流内容》</p> <ul style="list-style-type: none">・ 低学年...歌・お話・ゲーム・折り紙・あやとり など・ 中学年...案内状(パソコン)・早口ことば・せっせっせ・リコーダー・歌・ことば並べ替えゲーム など・ 高学年...家庭科でのもの作りを通して交流・劇・輪唱 など |
|--|

年間計画を立てたので、学習に見通しをもって進められるようになった。発表という一方通行から、交流という双方向へと変わり、地域の高齢者と子どもとの関係が、自然に拓かれる入り口ができつつあると感じる。

アンケートをとった結果、双方ともに好評である。

5. 外に開くためのアプローチ

(1) 子どもも大人もつながる地域

中学校区地域教育協議会

昭和44年、地域の青少年の健全育成をめざし、進学中学校を中心に関係小学校2校・地域の関係諸団体・PTAなどの組織を束ね、地域の教育協議会をスタートさせた。現在も、学校を拠点に地域が丸となって、地域の子どもたちを守り・育てていく活動に努力を重ねている。月1回は「地域で子どもと遊ぶ日」を設け、また、年1回は組織をあげての大きなイベントを行うなど、学校週5日制の受け皿を、地域ぐるみで担っているといえる。

学校評議委員会

平成12年、地域に開かれた学校づくりの一環として、教育が地域の人々とともに創造される学校・地域づくりをめざし、中学校区において、学校評議委員会が設置された。地域の人々の思いや願い、力が生かされることを大切に共生・創造の性格をもつものである。

地域教育協議会は活動・取り組みの連携機関、学校評議委員会は学校の自主性を縛ることなく、提言・助言を行う機関という共通理解をしながら、年4回程度実施している。

6. 情報発信と学校評価

< 広げる ・ 生かす >

(1) 学校評価に向けて

大阪府は「大阪府教育改革プログラム」を策定し、「生きる力」を育成することを目標に教育改革に取り組んでいる。それをより確かなものにするためにも、客観的な評価は欠かせないものである。

平成15年度の大阪市の「学校の評価システムに関する調査研究」の報告書によると、大阪市小学校における学校評価は、

・ 聴取方法	会 議	96%
・ 外部評価	保護者から	31%
	地域から	22%
	児童から	18%
・ 学校評議員類似制度		5%

という結果がでている。

そこで、本校において、外部を意識した評価として、少なくとも児童アンケートを実施したいと考えた。

会議を重ね、以下の項目でアンケートを実施することにした。

項目

A	学習について
B	通知表について
C	学級・友だちについて
D	先生たちについて
E	学校教育目標について

時期 : 年2回(10月・2月)

生かし方

1回目のアンケート結果をグラフにまとめる。特に評価の低い項目について、達成目標をたてる。(目標数値を%で提示する)2回目の実施で、1回目と比較し、指導の見直しと次年度の課題を設定する。

(2) 情報の積極的な提供に向けて

「校長室だより」を発行し、その中で伝えるべき内容を情報として提供していく。

関係諸団体との連絡会で、学校教育目標、教育

活動、学校評価について情報を提供する。

- ・ 社会福祉協議会総会での協議会
- ・ 民生委員会との連絡会

まとめ

愛	...	あ	い
我が地域	...	わ	が ちいき
自慢のサービス	...	じ	まんの サービス

図のように、タイトルの最初の文字をとれば「あわじ」となる。

地域よさを学校教育に十分取り入れ、地域との連携が充実することは、児童の安全が守られ、児童が本来もっている優しさが引き出せるという成果がある。

この活動をきっかけに、地域の挨拶運動が始まった。毎週たすきをかけて、校門で丁寧にかわされる挨拶に、子どもも思わず丁寧に挨拶を返している。

「食事サービス」「交通安全誘導・安全パトロール」「挨拶運動」地域のサービスと学校のサービス、共に子どもの命と優しさを守り育てる、地域・学校の自慢のサービスである。

1. 教職員の意識改革

教職員間をつなぎ・まとめ、チーム指導を試みたことにより、学校全体として指導を開くことへの抵抗は減った。

さらに、保護者・地域との交流を、特色ある学校の教育活動として教育課程に位置づけ、さらに意識づけることにより保護者・地域との「協働」という意識は高まっている。

2. 学校評価

学校の自己評価の一方法として、児童アンケートを実施した。子どもたちの思いや願いを受け止め、十分に達成できていない点は次の課題として明確にもつことができた。さらに、保護者・地域への説明責任も客観的データをもって果たせるようになった。

3. 外部評価

「小学校区教育協議会 - はぐくみネット - 」という組織は編成できた。教育活動はこれまでの取り組みを整理したことで共有できている。

今後は、「はぐくみネット」という組織としてどのような成果と課題があるか、教育活動を評価しなければならない。そのために、児童アンケートの見直しとともに、保護者・地域からの、外部評価を得ることは必至である。

そこで「はぐくみネット」での外部評価を学校評価にどう生かすかが今後の課題である。

